

花ノ檻

公開日

2015
10.25

登場人物

祀 秋江

：

ミルクテイーのような薄い髪色（染めている）をした少女。

古くからある名家の娘。家の決まり故、家を出ていった兄に兄妹以上の感情を抱いているようだ。

雪ヶ原 美涼

：

いつも金木犀の樹の下で本を読む、大和撫子と言う言葉がびつたりの少女。

義理の兄であり、婚約者でもある一葉を心から慕い、彼の妻となる日を楽しみにしている。

茜崎 未桜

：

秋江の友人。図書委員長。本を愛し、それ故に図書委員長になった。

神取 玲那

：

進藤のことが大好きな少女。進藤のストーカーをしていたが、ひよんなことで彼の恋人となる。

雪ヶ原 一葉

：

美涼の義兄兼婚約者。物静かな青年。

進藤 孝典

：

華咲学園の教師。熱すぎず冷めすぎず、適度なテンションを保つ普通の教師に見えるが……

未桜

私は昔からとても内気な性格で、友達があまり多くはなかった。ひどい時期は誰も友達がなくて、いつも図書室で本を読んでばかりいた。本は私の友達で、だから高校生になって図書委員長という役割にもついた。……そんな私がたった一つ嫌いだったのが、お姫さまの恋が叶う童話だ。私はお姫さまになんてなれないから。私には、お姫さまのお世話をする醜い下女がお似合いだ。お姫さまが恋をして、王子様と幸せになるのをただ影から見守るだけの、空気のような存在。

◎放課後の図書室。

図書室の施錠をしに来た未桜、窓辺に腰掛けている秋江に声をかけに行く。

未桜

……秋江。もう閉館するよ。

秋江

ああ……ごめんなさい。もうそんな時間だったのね。

◎秋江、窓から降りてスカートの皺を伸ばす。

未桜

彼女の名は、「祀 秋江（まつり あきえ）」……この学園での、私の唯一の友達。雪のように白い肌に、長い睫毛に縁どられた切れ長の目。ルーージュを塗っているのか、赤く染まった柔らかそうな唇。そして、まるでミルクティーみたいな色の髪。……見た目は不良にも見えるけれど、秋江は至極真面目で淑やかな、お姫さまのように美しい少女だ。薄い色の髪が、異国の姫君のような印象をさらに強くしている気がする。

未桜

毎日毎日、飽きないね

秋江

ふふふ……。いつも未桜に迷惑をかけているわね。ごめんなさい。

未桜

別に構わないけど……

秋江

ふふ、未桜は優しいのね。

……じゃあ、私は先に寮に戻っているわ。いつもお疲れ様、未桜。またあとでね。

◎秋江、図書室から去る。

未桜

ひらひらと、細くて白い手を振って、秋江は去っていった。……彼女は放課後になると、毎日この図書室にやってくる。別に本を読みに来るわけではない。彼女の定位置は、図書室にある大きな窓。そこに腰掛けて、いつも窓の外を眺めている。この窓から、私たちの通う華咲（はるさき）学園自慢の庭園ほとんどが見渡せる。……はじめは、その庭を見ているのだと、思っていた。

◎未桜、窓に近寄り、窓から外を見る。

未桜 ……やっぱり、いる。

未桜 この窓から特に良く見える、秋桜の庭。

その名の通り一面に秋桜が咲いているその庭は、今の時期、学園の外の人間に一般公開されている。丁度、放課後の時間帯に。

…そしてこの秋桜の庭に、秋江が毎日のように見つけ、その身を焦がしているひとがいる。

未桜 秋江の王子様…

未桜 学生帽を目深にかぶった、背の高い男のひと。

彼は毎日秋桜の庭の隣で、じつとどこかを見つめている。

彼の視線は決してこちらに向けられない。

…秋江は、決してこちらを見ることのない王子様に恋い焦がれるお姫さまだ。

美しく可憐な、恋に身を焦がすお姫さま。普通の恋物語なら、いつかその想いは報われる。でも…

未桜 お姫さまの想いは報われず、恋慕の炎に焼き尽くされることだってあっていいと思うの。

…ねえ、秋江…

未桜 この学園は、外部との接触を断絶している。今一般公開されている庭は、校門の外側にある。

庭を見に来た彼らは、決して学園の乙女たちと触れ合うことはできない。

乙女たちもまた、外部の人々と触れ合うことは許されない。

この学園を、「花の檻」と表現した詩があったような気がする。とてもロマンティックな表現だと思っただのを覚えている。

…そんな、美しい檻の中で王子様に恋焦がれる囚われの姫君、秋江。絶対にその想いが相手に届くことはない。仮に届いても、触れ合うことなど許されない。

嗚呼、なんて悲しくて浪漫のある恋なのだろう！

未桜 秋江…あなたの恋が叶うことはありえない…かわいそうな、お姫さま…

でも大丈夫…檻の中で、私がずっと、あなたの傍にいてあげるから…なんてね…

◎未桜、窓をあける。風と鳥の音が図書室に入ってくる。

未桜 ……王子様の視線の先にあるものは、何かしら？

ここからあなたを見つめ続けるお姫さまの心に気づかないで、あなたは一体、何を見ているの？

未桜 その視線の先にあるものが、別のお姫さまであればいい。

…そして醜い下女が、恋に身を焦がし苦しむお姫さまの心を救うのだ。

これで私の理想の恋物語は完成する。

最後に幸せになるのが、ずっとお姫さまを慕い続けてきた醜い下女でも良いじゃないか。

…そんなことを夢見る私は、最低だろうか。

◎職員室に入ってくる美涼。

美涼 失礼します。進藤先生はおられますか。
進藤 ……雪ヶ原（すすきがはら）か。どうした。

◎進藤、美涼に呼ばれて職員室の入口へ。

美涼 日誌を提出しにきました。
進藤 ああ……今日はお前が日直だったか。

◎美涼、日誌を進藤に差し出す。

進藤がそれを受け取った直後、遠くでカメラのシャッター音が聞こえた。

進藤 ……！
美涼 ? 先生? どうかありませんか……?
進藤 あ……い、いや、なんでもない。すまん。ありがとうございます、今日もお疲れさん。
美涼 はい。それでは、失礼します。先生、さようなら。
進藤 ああ、さよなら。

◎美涼、職員室を出る。

そのまま、庭へと向かう。

美涼 放課後。私は晴れている日はいつも、この金木犀の庭にやってくる。
名前の通り、金木犀の樹がたくさん生えている、学園自慢の庭の一つだ。
この時期になると、一面がオレンジ色に染まり、心地の良い香りが漂う、とても美しい場所。
ここでとある詩を読むのが日課になっている。

◎金木犀の樹の下にあるベンチに腰掛け、詩集を開く美涼。

美涼 ……『ここは檻のなか少女たちの幸福な牢獄』……
……一葉（かずは）、義兄さま……

美涼 ……この詩集は、私の義理の兄であり、……婚約者でもある、一葉義兄さまから頂いたものだ。
義兄さまは寡黙で、あまり表情も変化しない。でも、その切れ長の黒い瞳は、
いつもとても優しい光を宿していた。
その優しい目で、義兄さまはいつも、この詩集を読んでおられた……

◎回想。数年前。

雨の降っている日、美涼は一葉の部屋にやって来る。

美涼 一葉義兄さま？

一葉 ……美涼。

美涼 雨が降ってきましたので、窓を閉めるように、とお母様が…… 失礼します。(◎窓を閉める)

一葉 ……あの、いつも、何を読んでおられるのですか？

美涼 ……詩集だよ。「花の檻」という名の……

一葉 はなの、おり……？

美涼 とある学園の教師が、その学園をイメージして書いた、という噂がある……とても美しい詩だ。

一葉 義兄さまは、その詩集が大好きなのですね。毎日読んでいらっしやるから……

美涼 ……あの、どのような詩があるのですか？

一葉 興味があるのなら、これを貸してあげよう。

◎一葉、美涼に詩集を差し出す。

美涼 まあ、よろしいのですか？

一葉 ああ、構わない。

美涼 嬉しい……！ ありがとうございます！

一葉 ……(微笑む)

美涼 あの時、義兄さまが微笑んでくださったような気がした。

美涼 それがとても嬉しくて、私は毎日毎日、この詩集を読み返してはその感想を伝えていた。

美涼 義兄さまは何も言わなかったけれど、私の言葉にそっと頷いてくださったっていた。

美涼 ……あの日から、少しだけ義兄さまとの距離が縮まったような気がする。

◎回想終わり

美涼 ……華咲学園……花に囲まれた、まさしく花の檻のなかにあるような学校……

美涼 詩についてお話しているときに、義兄さまが教えてくださった。

美涼 この詩は、「華咲学園」という花に囲まれた女子だけが通う学園をイメージしているのだと。

美涼 ……それを聞いて、私はその学園に入学したいとお父様とお母様にお願ひした。

美涼 外部の人間との接触を一切断ち、教師以外は女性しか周囲にいない場所。

美涼 静かで美しい、檻のなか。

美涼 『ここは檻のなか 少女たちの幸福な牢獄

檻のなかの花たちの わらいごえが聞こえる……』

美涼 私たち生徒は、三年間、この花の檻のなかに閉じ込められる。

美涼 愛しいひとと会うことすら許されず。でもそんな檻の中を、詩の作者は「幸福な」と表した。

美涼 それは何故なのだろう。義兄さまに聞いても、教えてはくれなかった。義兄さまならきっと理解

美涼 しているだろうと思ったのだけれど。

美涼

……この幸福な牢獄から出るとき、私たちはどうなるのだろう。
……また別の牢獄に捕えられるのかもしれない。「家」という名の。
生まれた時から定められた運命に。

◎回想。学園入学が決まり、美涼が家を出た日のこと。

一葉

……あの学園に入学するのか。

美涼

はい……

一葉

そうか。ならば、三年の間は会えなくなるな。

美涼

……

一葉

……では俺は、お前の事を、檻の外で待ってしよう。

美涼

義兄さま……

◎回想終わり

美涼

もし、「家」という名の檻に再び捕えられるのだとしても、私はきっと幸福なままなのだろう。
義兄さまと一緒に、檻のなかに閉じ込められるのだから。

美涼

嗚呼……義兄さま……一葉義兄さま……早くあなたのお傍に、行きたい……

美涼

『ここは檻のなか 咲き誇る花々の幸福な宴場（うたげば）』

◎秋江、中学一年生の時。雪が降る庭で、兄との別れを惜しんでいる。

秋江 ……お兄様。
一葉 ……
秋江 本当に、行ってしまおうのですね…
一葉 ……ああ。
秋江 悲しい、なんて言うてはいけないのですよね。ずっと前から、決まっていたことだもの…
一葉 ……秋江、

◎一葉、秋江を抱き寄せる。秋江、一葉の胸に顔を埋める。

秋江 おにいさま…
一葉 たとえ、二度と会えなくなっても、俺はずっと——…

◎場面転換。現在、華咲学園の金木犀の庭を秋江は歩いている。

秋江 ……私には、兄がいた。寡黙で、いつも部屋の隅で本をよんでいるようなひとで、雪のように白い肌と、切れ長の、優しい光を宿した目をしていた。
私の家、「祀家（まつりけ）」は、代々女が家を継ぐという少し変わった決まりがある。男の子どもである兄は、雪がたくさん降っていた冬の日、他のお家に行ってしまった。たしか、私が中学生だった頃のことだ。

秋江 ……ごきげんよう、美涼さん。お隣、いいかしら。

◎ベンチで詩を読んでいる美涼に声をかける秋江。

美涼 秋江さん。 ええ、どうぞ。
秋江 ありがとう。

◎秋江、ベンチに腰掛ける。

秋江 兄にもう会えないことは覚悟していた。……それなのに。
とても寂しかったけれど、仕方のないことだと分かっていた。……

秋江 また、その詩集を読んでいるのね。
美涼 ええ。 義兄から借りた、とてもお気に入り詩集だから…
秋江 ……あなたのお義兄さまは、その詩集が好きだったの？

美涼

毎日、この詩集を読んでいらしたから、きっと好きだったのだと思うわ。

秋江

…この学園をイメージして書かれた詩集で、学園の教師が書いた、という噂もあるそうよ。ふうん…。 どういう詩があるの？

美涼

…最初の詩は、『ここは檻のなか 少女たちの幸福な牢獄』という一文からはじまっているの。この学園が花に囲まれているのを、作者は「花の檻」と表現してみたみたい。その「花の檻」の中で生活する少女たち…多分、学園の生徒のことを描いた詩、だと思うわ。花の檻…へえ、なんだか素敵ね。でしよう？

美涼

秋江

…知らないフリをしているけれど。本当はその詩集を、よく知っている。…兄が、ずっと読んでいた詩だから。兄は昔、私に言った。「お前がいずれ通う学校は、花の檻の中にあるのだよ」と。

美涼

秋江さんも読んでみる？ とても美しくて、素敵な詩よ。

秋江

…いいえ、遠慮しておくわ。文章を読むのは苦手なの。それに…

◎秋江、美涼のほうを向いて、手を彼女の頬に添える。

美涼

秋江さん？ ……！

◎秋江の顔が美涼に近づき、やがて二人の影が重なる。
美涼、手に持っていた詩集を取り落とす。
(遠くで、カメラのシャッター音が聞こえる。)

秋江

私は知っている。この人…雪ヶ原美涼という少女が、兄の心を奪っていることを。兄が毎日この金木犀の庭の向こう側で、この少女を見つめていることを。そして今も、兄は…「二人の妹」の戯れを、きつと見ている。

美涼

あ…あき、え、さん

秋江

…おどろいた？

美涼

な、なにを…

秋江

ふふ…美涼さんがずっと詩のことばかりお話するから、ちよつと嫉妬しただけ。

美涼

あ、あなたが聞いてきたのに…

秋江

ふふふ！ …ねえ、美涼さん？ ここが花の檻の中なら…外には、何があるのだと思う？

美涼

え？

秋江

私たちは檻の中にいる。檻の外側にあるモノと触れ合うことは許されず、それがどれだけ悲しいことかも知らないで日々を過ごしている。…いつか檻の外に出て、幸せになれる日を夢に見て。

◎過去の一葉の言葉が脳を過ぎる。

一葉

…たとえ二度と会えなくなっても、俺はずっと、檻の外から、お前の事を見守っている。

美涼

秋江、さん……？

◎秋江の頬を涙が流れていく。

秋江

私は多分、この檻の中から逃げ出すことはできない。連れだしてくれるひとが、いないから。私はずっと、檻のなか。

反対に、彼女はきつと、愛しいひとの手によって牢獄から救われるのだろう。嗚呼、なんて、……妬ましい。

秋江

檻の外にあるもの、いつか私に、教えてね……

秋江

『ここは花の檻 逃げ出すことのできない、美しき地獄の園』

玲那

せーんせえ！

◎玲那、空き教室に入ってくる。

進藤

…：神取（かんどり）…：

玲那

はい、いつもの！

進藤

…：

◎玲那、写真数枚を進藤に差し出す。

進藤、複雑な表情でそれを受け取る。

玲那

せんせえってば、ほんとにヘンタイさんだよねうふふ！

どうどう？ 今日綺麗に撮れてるでしょ？ 今日はねえ、すごいレアな写真もあるのよ！

玲那

進藤（しんどう）先生は、私の大好きなひと。

少しオジサンだけど、ハンサムで優しくて、でも適度に厳しくて…：完璧だと思うの！
私はずっとずっと、先生のことを見ていたの。
でも教師と生徒。親しくなることなんてできない、と思っていたんだけど…：。

進藤

神取、もう…やめてくれ…：

玲那

ええ？ どうしてえ？

進藤

こんなことをしては駄目だ…：犯罪だぞ、これは

玲那

何を言ってるの？ …：生徒のストーカーをしていた先生には、言われたくないなあ？

進藤

…：っ

玲那

むしろ感謝してほしいな。私がこうやって、先生に彼女の写真を渡すようにならなかったら、

せんせえ、いつか職を失っちゃってたかもしれないのに！

玲那

この学園は、女の子ばかり。綺麗な子も、私みたいに地味で目立たない子も、
びっくりするくらい太っている子も、逆にガリガリな子も…：いろくんな子がいる。

そんな女の子たちの中で、際立って美人だ、と言われている子、雪ヶ原美涼。

先生は、その子のストーカーさんだった。毎日毎日、彼女のことを見ていたの。

…：ふふふ、そんな先生のことを毎日見ていた私だから知っている、先生の秘密。

玲那

ほんと、雪ヶ原さんって美人よね！ せんせえが好きになっちゃうのも分かるなあ

進藤

神取、

玲那

ねーえ、…：れな、って呼んでよお 二人つきりなんだからあ…：

進藤

（溜息） …：玲那。

玲那

孝典（たかのり）せんせえ…：えへ…：

◎玲那、進藤の膝に座り、彼の首に腕をまわす。

進藤 玲那 ……お前の望みは一体なんだ。俺を脅したって、何も
もお、やだあ、せんせえったら！ 私は、ただ先生とこうやって一緒にいらられるだけでいいの！
オトメゴコロを分かってないんだからあ……

玲那 先生は、ちよつとドンカンさんなのかな？
何度も言っているのに。「私は先生のことが大好きです、こうやって写真を撮ってきてあげるから、
私のコイビトになってください」って！
……脅してるつもりなんてないのに、先生ってば失礼ね。
でも、嫌いになんてならないけど。うふふ！

進藤 玲那 お前の気持ちは嬉しい、だが、
せんせえ、……私、雪ヶ原さんみたいに美人じゃないけど……
コイビトだから、何しても良いんだよ？ 雪ヶ原さんにしたかったこと、私にして、良いんだよ？

◎玲那、制服のボタンをはずし始める

進藤 玲那 やめろ、神取……
まあた名字で呼ぶんだからあ……
ふふふ……私ね、結構カラダには自信あるんだよ……
先生の為に、誰にも見せないでいたんだから……

◎制服の上着を脱ぎ、進藤に身を寄せる玲那。

進藤 玲那 やめなさい！
きやつ……！

◎進藤、玲那を突き飛ばす。玲那、突き落とされて尻もちをつく。

玲那 ……もお、ひどいなあ……痛たあ……
進藤 玲那 大人をからかうのもいい加減にしろ
玲那 からかってなんてないよ！ 私は、本当に先生の事が好きなの！
先生の詩を読んだ時から、ずっとずっと、先生のことを見ていたのよ！
……！ な、なんでそれを……
進藤 玲那 私のパパね、出版社の、センムトリシマリヤク？ なの。
だからね、こっそり教えてもらっちゃった……
元々あの詩集、「花の檻」でこの学園に興味を持って、教師が作者だって聞いたから、誰なのか気
になつて……うふふ！

進藤 玲那 ……（動揺）
先生のことが本当に好き……先生がちよつとヘンタイさんでも、オジサンでも、好きよ……
ねえ、先生……先生は、先生が詩を書いたことも、悪いコトをしたのも、
誰にも知られたくないのよね……？

◎玲那、立ち上がり、進藤に歩み寄る。
彼の身体に腕を回し、耳元でささやく……

玲那

ここは檻のなか 少女たちの幸福な牢獄……

進藤

せんせえの腕の中を、私の牢獄にさせて……なんて、うふふ！
……。 どうやら、牢獄の中にいるのは、少女たちだけではなかったようだ、な……

◎進藤、玲那を抱き寄せ、その身体を机に押し倒す。

玲那

先生を牢獄に閉じ込めたのは私、かな？ ふふふ、それでも良いわ。
綺麗なお花の牢獄に閉じ込められた先生と私。とっても素敵！
……先生が悪いんだよ。脅すつもりなんて本当になかったのに、先生が、あんまりにもイジワル
いうから……

◎二人の影が重なっていく。玲那、手を進藤の顔に伸ばす。

玲那

「幸福な」牢獄なんだから……いいじゃない、ね、せんせえ……？

玲那

先生の大きな手が、私の身体を滑っていく。
ふふ！……先生は、もう私のモノ。絶対に手放さない。
私と先生、二人だけのヒメゴト。
……ここはなんて、幸せな牢獄なのかしら！

玲那

せんせえ……明日は、もっとたくさん写真を撮ってきてあげるからね……ふふふ……

◎静かな教室に、衣服のこすれ合う音と、机が軋む音だけが響く……

End.

花ノ檻

ここは檻のなか

少女たちの幸福な牢獄

檻のなかの花たちの わらいごえが聞こえる

ここは檻のなか

咲き誇る花々の 幸福な宴場

何も知らぬ花たちの 花弁がふわりと舞い上がる

ここは花の檻

逃げ出すことのできない、美しき地獄の園